

研究ノート

「嶋原大變記」にみる島原藩士の精神と救護活動

山 本 主 税

(長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科)

Looking at the Spirit and Relief Activities of the Shimabara Clan
through the *Shimabara Taihenki*

Chikara YAMAMOTO

(Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

220 years ago on April 1, 1792, activity of the Unzen Fugen Dake volcano caused Mt. Mayuyama to suddenly collapse and the area below Shimabara Castle to slide into the sea. This resulted in a giant tsunami in the Ariake Sea, with waves of 10–30 meters claiming the lives of 15,000 people (10,000 from Shimabara and 5,000 from nearby Kumamoto). This is the worst volcano-induced natural disaster in Japan's history.

The expression *Shimabara Taihen Higomeiwaku* was coined at this time. The leaders of the Shimabara fiefdom organized an impressive relief and disaster recovery campaign. Nevertheless, these activities remain relatively unknown in other parts of the Japan.

Based on records of the recovery effort for this unprecedented disaster, this paper offers suggestions and lessons to consider as Japan once again begins to recover from its most recent and most devastating natural disaster to date.

Key words

Eruption and restoration, Tsunami devastation, Samurai duty, Strength of the soul

要 旨

今を去る220年前の寛政4年(1792年)4月1日の午後7時ごろ、前年から続いていた雲仙普賢岳の地震と噴火の影響を受けてか、眉山自体の噴火活動が原因なのかは未だ判然としないが、眉山が山頂を含めて一気に崩壊、城下の市街地を飲み込み海へなだれ込んだ。そのため有明海では大津波が発生し、島原側で1万人、熊本側で5千人合計1万五千人もの死者を出す我が国最大の火山災害となった。「島原大變肥後迷惑」とはこの時生まれた言葉である。この島原大變の時、7万石の小藩である島原藩の藩士たちは、一糸乱れず見事な救護活動と災害復旧活動を展開したが、このことは全国的にはあまり知られていない。未曾有の災害の中で何故に彼らはそれほどの活動が出来たのか、彼らの当時の活動の記録を読み解くことから今後の我々が災害に備えて学ぶべき示唆や教訓を明らかにしてみたい。

キーワード

地震と噴火、津波の惨状、武士の本分、丈夫の魂

はじめに

地震、雷、火事、親父。かつての日本人にとってこの四つは手に負えないほど恐ろしいものの代表であり恐怖の序列であった。

現在では四番目の親父の権威は完全に失墜したが、地震が人の手に負えないもの怖いものの筆頭であることは17年前6,000余人の死者を出した阪神大震災と昨年の3.11東日本大震災が、今日の日本人に嫌と言うほどその恐ろしさを教えてくれた。

かつて物理学者であり作家でもあった寺田虎彦は『災害は忘れたころにやってくる』との名言を残したが、近年の日本では災害は「忘れる間もなくやってくる」と言ってよいほど地震、津波、噴火、台風、洪水、高潮、竜巻などの大規模な自然災害に見舞われている。

筆者は昭和57年（1981年）の長崎大水害、平成3年（1992年）の雲仙普賢岳噴火災害、平成7年（1995年）の阪神淡路大震災の三つの大災害では直接現場に飛び込み長期間の救援活動を行うという稀有な体験をした。

昨年3月11日に発生した東日本大震災では2万人近い人々が死亡・行方不明となった。この大災害後の政府、自治体、住民、ボランティア、警察、自衛隊、海上保安庁、消防、さらには海外からの救助隊、米国海軍の支援活動やボランティアの活躍などはこれまでも詳しく報道されているし、被災地の願いをよそに、政治家の統治能力の劣化からか未だに本格的な被災地の復興は遅々として進まないでいるのは国民だれもが知っているとおりである。

3.11に際し、長崎国際大学も学生・教員からなるボランティアを二度にわたり現地に派遣したし、佐世保市が行った支援物資の仕分けと梱包、発送作業に多くの教員学生が従事し、また募金活動にも大学をあげて協力した。

しかし今回の災害では筆者は僅かに学生たちと佐世保市の支援物資センターで物資の仕分けや搬送作業を手伝った程度で、さしたる救援活動も直接的な貢献もできなかった。

そこで、3.11とその後の諸活動についての評価や提言は、他の多くの論者に委ねることとし、本稿では3.11災害後の今日の政府や政党、原発事故を起こした大企業などの何とも頼りない対応を見るにつけ、今を去る220年前、長崎県島原城下でおきた地震による眉山の大崩壊と、それに伴って発生した有明海の大津波被害に対する島原藩と藩士たちの機敏で一条乱れぬ救護活動と復旧活動を対比してみようと考えたからである。

まずは島原大変肥後迷惑について論ずるにあたり、雲仙岳という山が歴史上何度も同様な火山活動と災害を起してきた山であることを確認しておきたい。

雲仙岳とは

雲仙岳は、ほぼ400万年前から始まった九州島の火山活動から生まれたと言われている。現在の雲仙岳は、普賢岳（1,359m）、妙見岳（1,333m）、国見岳（1,347m）、九千部岳、衣笠山等からなる複合火山であり雲仙岳とはその総称である。

なお現在では平成噴火でできた平成新山（1,486m）が群峰中の最高峰となっている。

普賢岳はそれら火山群の主峰であり、過去歴史上何度も噴火を繰り返してきた山である。

そこで本論ではこれら火山群の全体としては「雲仙岳」と表記し、過去千年間、噴火を繰り返してきた火山を「普賢岳」または「雲仙普賢岳」と表記する。なお雲仙普賢岳との表記は「雲仙の普賢岳」との意味である。

雲仙普賢岳の噴火活動の特性

雲仙普賢岳の噴火に伴う災害について述べる前に、雲仙岳火山の特性について概観してみたい。

九州島は今も地殻変動により大分県中部と長崎県南部を結ぶラインを境に南北に毎年1～2センチずつ引き裂かれ移動を続けているそうである。その裂け目の線上にマグマが噴出し今日

の大分県の鶴見岳、由布岳、九重山、熊本県の阿蘇山、長崎県の雲仙岳と東西に続く火山帯を形成しているといわれている。

長崎県島原半島の中央にそびえる雲仙岳も60万年前から一万年前の火山活動によって誕生した山であり、上記火山帯の西端の活火山である。

島原半島は現在では狭い愛野地峡によって長崎県本土と繋がっているため半島と呼ばれているが、本来は雲仙岳の数十万年間の火山活動が作りだした一つの火山島と言ってよい。

日本の活火山にはそれぞれ固有の周期で噴火するという特性を持っているようである。

歴史上、雲仙岳は過去千年ほどの間だけでも、概ね200年前後の周期で噴火を繰り返している。

前々回の噴火は明暦3年（1657年）、前回の噴火開始は江戸時代後期の寛政4年（1791年）であり、平成2年（1991年）の噴火からはちょうど200年前であった。

明暦の噴火、寛政の噴火、平成の噴火とも、噴火の前兆として火山性の地震が長期間続き、その震源は次第に半島西側の千々石湾から普賢岳直下に移動し（千々石湾の下にはマグマだまりがありそこからマグマが斜めに火道を昇り普賢岳の噴火口へ徐々に移動する。したがって地震の震源もマグマの先端の移動につれて千々石湾を出発し普賢岳方面へ移動してくる。）やがて山頂又は山頂近くから蒸気を噴出しはじめ、次に極めて粘性の高いマグマが山頂又は山頂近くの山腹から噴出するというパターンである。

普賢岳の噴火に伴うマグマは極めて高い粘性を持っている。そのために山頂の噴火口から噴出したマグマは上へ上へと成長し、いわゆる溶岩ドーム（溶岩円頂丘）を形成する。普賢岳の山頂部が過去の噴火のたびに巨大な溶岩ドームによって形成された釣鐘型の山容をしているのはそのためである。また海に向かって四方に広がる裾野は山頂の溶岩ドームが冷却による分裂と自己の重みで崩落し、その落下時に巨大な火砕流を発生させる。また高い粘性のために緩やかなスピードで流れ下る溶岩流（焼岩）や大量

の火山灰、火山礫が堆積しそれらが大雨の後で起こる土石流となって周囲の海へ流れ下り、長いすそ野を四方に形成したものである。

島原大變肥後迷惑

今も島原の市民は眉山を「前山」と呼ぶ人が多い。それは島原市街地から見ると半島中央により高くそびえている普賢岳が後方にあり、その手前にある山であるために親しみも込めて前山と言いならしてきたためである。

元々、崩壊前の眉山は二千五百尺余（標高820メートルほど）の高さがあり山頂は二峰に分かれ北峰を七面山（標高818.7メートル 現在も同じ高さ）、南峰を天狗山（崩壊前820メートル？現在695メートル）と呼んでいた。

今、島原市街地から眉山を見上げると、かつて南峰であった天狗山は山頂を含め山の半分が縦にざっくりとえぐり取られ垂直に近い数百メートルの絶壁をなし、まるで島原の町に後ろから覆いかぶさらんばかりに屹立している異様な姿が目に見え込んでくる。

今でも大雨や地震の度にばらばらと岩石や土砂が音を立てて崩落を続けている。この絶壁の壁面は、山体を形成する岩石が長年の火山の高熱と熱水・蒸気でボロボロにもろくなり白色に変化した白い絶壁である。

この光景こそ今を去る220年前の寛政4年（1792年）、雲仙岳の火山性地震と噴火活動が引き起こし眉山の山頂を含めた大崩壊を発生させ、日本の火山災害史上最大の犠牲者を出した「島原大變肥後迷惑」の発生現場なのである。

眉山の大崩壊は、島原城の南側に広がっていた町家の大半を一瞬にして押し流し海岸線を870メートルほど先まで伸ばした。3億4,000万立方メートルに及ぶ山塊の一気に押し出しによって有明海では10メートルを超える大津波（対岸の肥後では30メートルを超えた地点もあった）が発生、20～30キロ対岸の肥後・天草地方を襲い甚大な被害をもたらし、さらに返し波が島原側に戻って海岸の村々を襲いと、三度兩岸を往復

した。

このため、島原大變肥後迷惑による島原城下と有明海に面した島原半島東岸域での死者は約1万人、有明海を挟んだ対岸の肥後（熊本本土・天草諸島）側の死者は約5千人、合計1万5千人にのぼったと記録されている。

「島原半島記」によれば島原藩内での被害は下記のとおりである。

死者	家士576人、村市民8,835人、僧祝盲人132人
癒えずして死んだ者	106人
負傷者	707人
家屋の流失	城外小吏の家屋鎌房63戸、 村市民家屋3,284戸 流蕩民家370戸
水陸田の損耗	378町、損耗水陸田60余町
斃牛馬	109匹

と記録されている。

ところで、現在の我々は、当時のことを詳細に記録した「嶋原大變記」解説書を読むことで、220年前の雲仙岳の地震と噴火、眉山の大崩壊、それによって起こった大津波とその生なましい被害状況、さらには被災後の島原藩の対応や藩士たちの救護活動ぶりについて詳しく知ることができる。なお、この解説書は平成4年、島原古文書を読む会の方々の努力で古文書を入念に読み取り丹念に復刻されたものである。

筆者はこの復刻本を読んで、その中に現代の我々が「学ぶべきであった」貴重な示唆が数多く含まれていたことに気付かされ驚愕した。

そこで本論では「嶋原大變記」（原本の記録者は島原藩士天野銀左衛門といわれている）の中から参考となる幾か所かを抜粋し、筆者なりの現代語（的）訳文を付して紹介してみたい。又それについての筆者の所見・私見も記したい。

ただし嶋原大變記は江戸時代後期の文書とはいえ、武士が記録したものであり現代人にはや

や難解な文言・文字や表現、仮名使いなどが多いため、筆者が句読点や送り仮名を一部に付加している点をお断りしておきたい。

「嶋原大變記」（抜粋）に見る惨状

『天地の变化量るべからず。数日強き地震して如何成る変もはかれずとはかねかね申逢しかども、永永の騒ぎの末なれば、少しの地震等は心に懸けずして、人心落着き、悦びて平常の思いありて世の営みを始めしに、4月朔日の暮れに至りて、手強き地震二つしぬ。然れども幾久敷く地震になれて、佐のみ驚く事なかりしに即時に東の海鳴動して、只百千の雷の鳴りはためくにことならず。』

本書の記録者は「天地の変化（自然の災害）は量るべからず（予測できない）」との書き出しから始めている。予測外だった「想定外」の天災が発生したと最初に述べているわけである。

続けて上記の記録文には、前年10月以来、5カ月続いていた地震に恐れを抱いて一時市外に避難していた住民たちもやがて慣れっこになり、市内に戻り平常の生活を取り戻していたところ4月1日の夜（午後7時頃）、強い地震が二回あった。その時記録者はさほど驚かなかっただけ。しかし同時に東の海（有明海）が巨大な雷のように鳴動した様子が書いている。

この記録者は「強い地震が二回ほどあったがさほど驚く事でもなかった」と言っていることから、記録者はその時はたまたま島原の城内にいたか、眉山の崩落と大津波が及ばなかった武家屋敷地域にいたものと思われる。また百雷のような鳴動は眉山の山体がずるずると大崩落し海中へ一気に押し出し、押し出した大量の陸塊による大津波の発生による大音響であったのであろう。

災害発生当夜（4月1日夜から翌朝）の救助活動次に、災害発生後島原藩では、間髪を入れず

その晩のうちに城下の士士下士の身分を問わず17歳以上の藩士全員を夜間城内に緊急招集し、城下の被害状況の調査・把握と被災者の救助を命じ、あるだけのたいまつを持たせて被災地域へ直ちに出勤させたことについて述べ、その行動と城下の惨状を以下のとおり詳述している。また併せて藩士の家族全員を城内に避難させている。

『直ちに諸役役、雑人を数多く召連れて、大手田町の外に至り見るに、暗夜のことなれば何の様子もわからずして、大手の並木に市中の家居ことごとく打束ねたる様子のみにて、家の下に埋まり居たる者「助けて呉れよ」と号呼悲泣する声実にももの哀れなり。その泣き声を慕うて至り見るに、材木に押しひかれ、いやが上に積重ねたる下に居る事にて容易の事にあらず。御作事方より鉋鋸その他の道具持参して邪魔に成る木を切り助ける。斯するうちに息の絶える者もあり。』

直ちに役付きの藩士たちがそれぞれ多くの部下・使用人を引き連れて、追手田町の外に行ってみると、暗夜のため様子がよく判らなかつたが大手の並木に市内の家という家が大量に打ちあげられ積み重なっている。家の下に埋まった者が「助けてくれ」と泣き叫ぶ声が本当に哀れである。その泣き声を目当てに探してみると材木に押し付けられその上に多くの材木が積み重なっているため容易に救助できない。お城の工事方の倉庫から鉋（なた）・鋸（のこぎり）その他の道具を持ってきて邪魔な木を切って助ける。このようにしている内に息絶える者も多かった。（筆者注：大手とはお城の正門のこと、島原市には今も城の近くに大手門の立派な石垣が残っており、一帯は今、大手町と称している。）

上記の文章からは、暗闇の中で声を頼りに、がれきの中から僅かな生存者を必死で探し出し、乏しい工具を使って何とか助けようとする侍たちの姿が活写されておりその様子は、3.11の津波の直後、壊れた家々や瓦礫と泥の中から生存者を必死で捜し救助した警察官や自衛隊員の姿と重なってくる。

『又は土中に軀半埋まり居るを漸漸に掘り出して、大手田町御門の内へ連行て夫々（連れ行きてそれぞれ）介抱、お手当あれども、過半は養生叶わずして死したる者多し。』

又は土の中に身体が半分が埋まっている者をやっとな掘り出して、大手田町門の中（城内・三の丸）に搬び入れてそれぞれ介抱手当したが、半分以上は手当の甲斐なく死ぬものが多かった。

災害翌日（4月2日）の状況

『追手外田町内杯は養生叶わず死したる人、二日の昼ごろは目に照りつけられて色赤くなりて枕を並べいたるあり様、この世の事とも思われず。胸ふくれ今は只人のうえ、明日は我が身につもりて、あしきなき言うべきこともさらになし。

見ず知らずの人の死をみてさえかくあり。いわんや親兄弟のこのような浅間しき死に様をや。人々物に狂うも断也。』

追手門の外の手町辺りは手当の甲斐なく死んだ人たちが二日の昼ごろには太陽に照りつけられて色が赤く変色し、ずらりと並べられている死体の様子はこの世の事とも思えない。（私の）胸が張り裂けそうである。今はただ他人の不幸だが明日は我が身かもしれないと思うと、いうべき言葉も全くないほどである。

見ず知らずの人の死を見てさえこんなに悲しいのに、もし自分の親や兄弟のこんな悲惨な死に様を見たらどうであろう。人々

が半狂乱となって泣き叫び悲しむのも当然である。

いったん緩急あれば、主君を守り、国を守り、自家の名誉を掛けて常に死を覚悟している剛毅な武士たちが、多数の領民の無残な死を心から悲しみ同情している人間らしい心情がよく分かる。

当時の島原の武士たちの領民の不幸を悲しむ心の温かさが読む者の心を打つ。

『僅かに命助けたる人も、汐に浸され凍にものをもいえず。あるいは腕の折れたるあり、足腰ひしげたるもあり。今宵の変災は誠に瞬間の事なるに、丈夫なる木綿、若和布様になりたるを着たる人多し。丸裸になりたるもあり下帯ばかりもあり。』

かろうじて命を助けられた（助かった）人々も、海水に長く浸かっていたため、さらに寒さに凍えてものも言えない状態である。

中には腕を折った者、足腰が押しつぶされ、ひしゃげてしまった者もいる。昨夜の災害は短時間の出来事だったのに、元々丈夫なはずの木綿の着物がワカメのように（ズタズタになった）なったものを着ている者が多い。丸裸の者や下帯だけになった者もいる。

生存者の衣服がズタズタになったのは土石流に家とともに流され、津波に吞まれ海中にあっては材木・木片などとともに激浪に揉まれたためであろう。

このことは昨年（2011）年の3・11の大津波が、多くの破壊された家屋、材木、家具、車両等をぐちゃぐちゃに混ぜた状態で激しく流れ動いていたテレビの映像からも「奇跡的に助かった人々の衣服がズタズタになっていた」との記録はさもありなんと想像できる。

『傍浪勢の烈敷事（激しきこと）想い察すべし。怪我人へは 人参・氣付を早速給せ追追連越候（おいおい連れてきた）怪我人追手田町又三の丸御倉草原等辺へ集め 篝火を数ヶ所に焼てあたため 筵・菰等敷渡し 古看板等数多取出し寒さを凌がせらる。』

津波の勢いの激しいことを想像し察してほしい。怪我人には人参・氣付け薬をさっそく与え、次々に連れてきた怪我人たちを、追手田町またはお城の三の丸や倉庫のある平地の草原に集めて、篝火を数ヶ所に焚いて怪我人たちを温めてやった。また筵（むしろ）や菰（こも）等を敷いてやり、古い看板等を多数（倉庫から）取り出して（風から）彼らの寒さを減らすようにした。

藩は災害が発生したその晩のうちに負傷者を捜し出し、城内・城門近くに集め、薬を与え、治療を加え、暖を取らせるなどあらゆる救助・救命の努力をしていることが分かる。

『御殿医は申すに不及 村方よりも三十四人、招呼ばれ 評定所を医師会所と定め大薬灌・小薬灌・土瓶等にて薬を煎じ怪我人へ給させ あるいは砂鉢・植木鉢に等に膏薬を練 銘銘白木綿壺・式反も腰に巻いて治療を加えられける。』

御殿医は申すまでもなく、村在住の村医者も三十四人を呼び集め、御城の評定所を医師会所と定めて、大小のヤカン、土瓶で薬草を煎じ怪我人へ与えた。あるいは砂鉢や植木鉢などで膏薬を練り、（医師たちは）それぞれが白い木綿（もめん：包帯のこと）を壺・式反も腰に巻いて次々に怪我人の治療にあたった。

藩は、藩医（10名ほどか）だけでなく領内全域の村医者（30余人）も集め、これらの医師たちが野戦病院の医師のように薬や包帯、時に腐敗から命を守るために負傷者の手足を切断するた

めに、斧（おの）や鉋（なた）まで持てるだけ持って、懸命に負傷者の間を駆け回って治療にあたった様子がかがえる。

『尚又御台所には御家中上下の割り子の手配り 下台所にては怪我人並町在粥を炊き出し 中間小屋へ是を為持（もたせ） 場所場所へ遣し 様々の御手配り嚴重にして 怪我人深く御世話ありて療治を加えける故に 大方は全快敷けるとなる。』

なおまた、御台所では藩士たちの食糧の手配を行い、下台所では怪我人と町にいる被災者たちへの粥を炊き出し、中間小屋へこれをもたせて、場所場所へ配給し、様々の手配をしっかりと行って、怪我人たちを深くお世話し療治を加えてやったお陰で、かなりの者は全快したそうである。

ここには記録されていないが、藩は城内と城下の各所に炊き出し所を設けて、領民の救済のために毎回1,700人分の炊き出しを行っている。また、親身の治療・炊き出しなどによりかなりの負傷者が全快したと記している。

医師や藩士とその妻女たちの献身的な救助・医療・介護・炊き出し等の活動に対して、助けられた領民たちと被災した市民たちがどれほど喜び感謝したかが推測できる。

『朔日の夜中は只怪我の声を知るべに 家財木を踏越 剥越して是を助け、夜のうちは 常の津波成るべしと思いの外 夜明るに随い 前山の様体を見るに 南北半分は飛びて海中に幾千ともなく小山を築き、市中変じて山と成り 川と変じ、巳前（以前）の様子はなく昔に比べてみるに 僅 多葉粉（タバコ）一吸の間に斯成（かくなり）し事ども 只夢の如くにして 心の疑い覚えやらず。おそろしきとも はかなしとも 弁へ難し。』

昨日の夜中は、ただ怪我人の声をたより

に、（積み重なった）家や材木などを踏み越え 剥ぎ越こして必死になって生存者を助けだした。昨夜のうちは また津波があるかもしれないと思っていたが、夜が明けるにつれて、前山の様体を見ると 南北半分は飛んでしまって海中に幾千ともなく小山（小島）が出来ている。市中は変じて山となり 川と変じ 以前の様子は全くなく 昔に比べてみると、わずかにタバコを一吸いするほどの短時間なのにこうなってしまったなど、ただ夢のようで、（これが事実とは）信じられない。恐ろしいとも はかなしいともたえようがない。

「朔日の夜中は只怪我の声を知るべに 家財木を踏越 剥越して是を助け」
この文章は、3.11の直後、強い余震の中、津波の再襲来の恐れがある中で、その日のうちから瓦礫の中を懸命に生存者を捜しまわった地元消防団員や警察官の姿と重なってくる。

「南北半分は飛びて海中に幾千ともなく小山を築き」

眉山の大崩壊で海へ押し出した山塊と土砂は多くの島（海中に幾千ともなく）となって残った。これらを当時の人々は「流れ島」と呼んだ。しかしその後海浪によって浸食され島の数次第に減少し、伊能忠敬が島原大變の20年後の文化9年（1812年）に実施した第8次測量（九州2次測量）の時には島は59になっていた。また明治31年の測量時には31に、そして現在は16島に減少している。現在これらの島々を「九十九（つくも）島」と名付け、現在では島原市の観光名所ともなっている。

『追手並木へは家財を打束ね 其の間々へは死人幾百とも重なり居り。手・足・貌・尻ひら等顕し居たる在様見るにしのびず。』

追手の並木には（津波のために）家財が打ち束ねられており、その間々には死人が

幾百人とも重なっている。手や足、顔、裸の尻などを見せているあり様は見るに忍びない。

「追手並木へは家財を打束ね」その時津波は追手の並木の高さまで達したそうである。死人がその並木の辺りに家財とともに積み重なっている状況は3・11直後の東北沿岸の被害地区の惨状そのままである。文中で記録者は「在様見るにしのびず」と心情を吐露している。まさに3.11の直後救助に入った救助隊隊員の心情そのままであろう。

『足元見るに 死骸充滿たり 去共夫等（されどもそれら）をうるさしとも思いわずして 只死骸踏退て息あるを助くる事を専一とせり。』

足元を見ると死体が充滿している。しかしそれらを煩わしいとの想いなど全くも湧いてこないで、ただただ死骸の中を捜しまわって、まだ息をしている者がいればそれを助けたい一心であった。

「足元に死骸充滿、うるさしと思わず、息あるを助くを専一」この思いは生存者の搜索と救助に当たった200年前の武士たちも、3・11直後の救助にあたった救助隊隊員の思いと完全に同じである。

『二日の昼頃に至りても 白土・護国寺辺にも怪我人多くありて 是を大手へ連行けれども 暫くして息絶るもの多し。』

二日目の昼頃になって 白土・護国寺周辺にも怪我人が多くいたので、これらの人々を大手へ連れて行ったが しばらくして息絶る者が多かった。

『その中に廿四・五の若者 善法寺の近辺に流れよりて有るを見るに 半眼は石にや打ちつけむ飛出て ぶら付き居る 肩の表

より裏へ薪貫通り 見るも中々恐ろし。追手に連行しに 雑人に乞て（こうて）多葉粉（タバコ）一・二服して 御外科芝原立斉に謂て曰く（頼んで言った）「とてもなかろうべき命にあらず 希（のそみ）は肩の薪を抜て給り候らえ」と頼みければ是を抜見るに薪ささらしてある事なればあなたこなたに引掛りて中中最安く抜けず。漸く 力して是を抜きしに少しも痛める色なく 打ち悦んで礼謝し暫くありて死す。白土船津の漁人にて有りけるよし 下賤に稀なる丈夫の魂と各感心す。』

救助された者の中に、24・5歳の若者が、善法寺の近辺に流れ付いているのを見つけたところ、片方の眼は石にでも打ちつけたのだろうか、飛び出してぶらぶらとしている。また、肩の表から背にかけて薪が貫通し見るも恐ろしい状態であった。追手に連れて行ったところ彼は雑人（村方から動員された多数の人夫の他に牢屋入牢中で災害復旧に協力後は必ず無罪放放免することを約束された罪人40余名など）に（タバコを吸わせてくださいと）頼んで多葉粉（タバコ）を一服二服した後、外科医師の芝原立斉に頼んで「私はとても助かりそうでないことは分かっていますが、できれば肩の薪を抜いてもらえませんか。」と頼んだ。皆でこれを抜こうとしたが薪がささくれているため、あちこちに引掛ってなかなか簡単に抜けなかった。ようやく大勢で力を込めて薪を抜いたところ、少しも痛がる様子もせず、大いに悦んで皆に御礼を言ったが、ほどなくして死んだ。彼は白土の船津の漁師だったらしい。

身分いやしい者であるが、稀に見る男らしい立派な魂と皆が感心したものだった。

上記の一節を読み、よほど感銘を受けたものか、直木賞作家の白石一郎氏は昭和60年に発表したその著「島原大変」の中（p 72～74）

で、この漁師の「稀なる丈夫の魂ぶり」を次のように脚色し小説化しておられる。その時の安吉（もちろん白石一郎氏が付けた仮名ではあるが）、医師、若侍たちの心理・情景描写が秀逸である。また安吉の男らしさの表現が清々しく、20年ほど前に筆者はこの本を初めて読み、この辺りの描写に思わず胸が熱くなったことを覚えている。

『真夜中に近いころ、大怪我をした一人の男が若い侍の肩に担がれてきた。

「先生、お願いします」若侍に声をかけられ振り向いて怪我人を一目見ると一伯（筆者注：本書の主人公・長崎帰りの有能な若い医者）は息をのんだ。

若い男のようだが、左の眼球が飛び出して頬のあたりへ垂れ下っている。右胸には太い杭の様な棒が突き刺さり、その両端が胸の前後に飛び出している。

怪我人は地面に下ろされると横たわりもせず、気丈に腰を据えて坐った。

無事な右の片目で一伯の方を見ると

「先生か、本町小路の」名指されて一伯は男を見つめた。

ざんばら髪で全身血と泥でまみれた怪我人が、いつぞや魯木山で一伯に凄んで見せた安吉（筆者注：小説中での漁師の名前、一伯が自分の恋人で遊女に身をおとした小菊を弄んでいると誤解していた）だと気づくまでに、しばらく間があった。

「おまえは小菊の——。」

「先生よ」と安吉は言った。

「先生、煙草が吸いたか、一服吸わせてくれんかのう。」声はさすがにかすれていたが、言葉ははっきりと聞こえた。

周りに集まってきた若侍の一人がどこかへ駆けて行き、煙草に火をつけた煙管を持ってきて安吉に与えた。

「すまんなあ。」安吉は煙草を口へ運んで、深々と一、二服吸った。

眼球の垂れ下った左の眼窩から血の混じった漿液が流れ出している。棒杭の刺さった右胸からも血があふれていた。

二、三服、ゆっくり煙を吐くと、

「先生、おみつ（小菊の本名）も死んじまったらしい。おれもどうせ死ぬじゃろうが、楽に死にたか。こいつを引っこ抜いてくれんかね。」

安吉は肩から胸前に串刺しになった杭を右手で叩いて見せた。

一伯は声もなかった。

「たのむ先生、楽に死なせてくれや。」

一伯がなお無言のままでいると、

「抜いてやりましょう。本人が言うことです。」若侍の一人が一伯にささやいた。

若侍はみな、安吉の人間離れした気丈さに胸を打たれているようだった。

「先生、たのむ。楽にしてほしか。」

若侍たちが背中に回った。一伯が進み出て安吉の両肩を前から支えた。

抜けなかった。杭には肉が巻きついてしまっている。若侍が力任せに安吉の背中に突き出した杭を抜こうとし、そのたびに安吉の体は後ろにのけぞった。

しかも安吉は苦痛の声を挙げず、紫色になった唇を噛みしめているだけだった。

ようやく串刺しの杭が抜けたとき胸と肩から、どっと血が奔り出た。

「ありがと。」と安吉はいい、上体を前後にふらつかせていたが、どさっと仰向けに地面に倒れた。

「おいっ」声をかけて若侍が顔をのぞくと、安吉は眼をあけたまま息絶えていた。

しばらくはみな声もなかった。若侍たちは畏敬の表情をあらわにして、それぞれが安吉の遺体へ合掌した。』（白石一郎著「島原大變」昭和60年文芸春秋社発行より引用）

以上少し長くなったが、郷土出身の作家白石一郎氏（1931年朝鮮釜山生れ、戦後佐世保第二中学に編入、学制改革により県立佐世保北高第2

回卒)に敬意を表し原文のまま引用させていた
だいた。

さて、これから以下は筆者が「嶋原大變記」
を改めて読みなおし、その中から筆者なりに学
んだ事項を整理したものである。

島原藩の見事な対応を可能とした要因

- ① 眉山の山頂を含めずると一気に崩壊
した巨大な山塊は、島原城の南側に広がっ
ていた市街地と住民の大半を飲み込んで有
明海へかけ下った。この時の島原城下での
死者は7,000人と言われている。またその後
の3度の大津波も島原城の大手門の真近ま
で襲来したが、武家屋敷の大半とお城本体
には被害が及ばなかった。そのため島原城
が災害対策本部と救護所の機能を維持でき
た。

(本部中枢機能の生存)

- ② 当時殆どの者が眉山の大崩落や、まして
大津波の発生までは想定していなかったと
はいえ、打ち続く強い地震から藩では万一
の事態に備えて「災害対応マニュアル」と
言うべきものを重臣たちの協議によって事
前に成成し、藩士・医師たちの総動員計画、
藩士による救援体制の編成などが綿密に作
られて準備(しかも事前にその際の藩士の
行動指令書が数百枚も作られていた)され
ていたため、間髪をいれず全藩士が機敏に
効率よく初動できたこと。

(災害対策マニュアルの事前作成)

- ③ 全藩士たちが「今こそ可能な限り、領民
の生命を救い苦難を和らげることは、多年
禄を食んできた武士として当然の務めであ
る。」と奮起したこと。

(武士の本分確認と発揮)

- ④ (藩主は無能でも)その時の藩の家老・重
役たちに優れた非常時指揮能力があったこ
と。

(幹部の指揮能力)

- ⑤ 上記の①②③④があったればこそ、災害
直後からの藩士たちの一糸乱れぬ行動が可

能となった。(統一的活動展開)

- ⑥ 藩医(藩のお抱え医師10名ほど)全員だ
けでなく領内の村医者三十余名も非常呼集
し、藩内の医師を総動員して負傷者の緊急
医療にあたらせたこと。

(緊急医療体制の充実)

- ⑦ 藩が常々城内に備蓄していた食料と医薬
品を惜しみなく供出し被災者救済に活用し
たこと。

(食糧・医薬品の備蓄と活用)

- ⑧ 重臣・上士の妻や娘たちが、被災者への
炊き出しを行うとともに、飲み薬を煎じ、
軟膏を作り、医者に包帯を配り、負傷者
には衣服を配って回り、薪を各所で焚いて暖
をとらせ、負傷者には武士町人の区別なく
親身に介抱にあたるなど、よく医師の手助
け(医療助手・介護助手・ヘルパー)とし
て懸命に活動したこと。

(女性パワーの活用)

- ⑨ 城内の御作事方(造修所)に保管してあ
った大量の鋸、鉋、等の大工道具その他の工
具、材木、荷車、熊手などを被災者救助用
に活用したこと。

(必要機材の事前準備と活用)

- ⑩ 夜間は城内、城下各所に篝火を焚き、暗
闇の恐怖とまだ続く地震におびえている生
き残った住民に安心感を与えたこと。

(住民への安心感の付与)

- ⑪ 無人となった区域での盗賊の跋扈を防ぐ
ため、若い藩士を中心に刀槍で武装させ昼
夜、市中の巡回警備にあたらせたこと。

(防犯体制の整備と治安維持)

- ⑫ 藩は領内の村々から多数の領民を人夫
(作業員)として呼び寄せるとともに、入
牢中の40余人の罪人たちに「領民救援に協
力すれば事後必ず無罪放免とする」ことを
確約し、彼らも戦力に組み入れて活用し、
生存者の発見と救助、負傷者の搬送、遺体
の収容と埋葬等に従事させた。なお流され
た浄願寺の跡地に大きな穴を掘り、彼らは
ここだけで700人の死骸を埋めた。

(マンパワーの動員と活用)

- ⑬ 直ちに幕府、近藩へ被害状況を知らせるとともに救援を依頼したことにより、幕府から1万2千両を借入れ、大阪商人たちから18万両を借り入れて復興財源に充てることができた。さらに佐賀藩を始め九州各藩からは物心両面の支援を受けることができた。(関係先への通報と支援要請)

悔い(反省)

① 幹部の危機予測の甘さ

藩の重役たちは、4月1日の災害発生はかなり以前から眉山の山体の各所に縦横方向に大きく長い亀裂が生じ、山体が滑り落ちそうになっていること、また眉山の裾にあった楠平という東西六十間、南北百二十間の小山が、百間あまりもずりりと地滑りを起こしてずり落ちてしまったことを知っていたながら、眉山の大崩落という最悪の事態までは想定しなかったこと。

つまり、重役たちには「心配ではあるが、その内に地震も、千本木方面の溶岩流(焼け石)の流下も収まるだろう。仮に眉山の地滑りがあったとしても大したものとはなるまい。」との思い込みがあったのではなからうか。

② 最高責任者の無責任な行動と市民の油断

また、眉山崩壊の前に藩主が城外の守山村へ避難したことを知った町民たちが、城下から南北の近村へ一斉に避難し、一時殆ど無人地帯となっていた町に、まだ大小の地震(震度3~5?)が日に数十回となく頻繁に続いているにもかかわらず、町民たちが地震の揺れに慣れ、また避難先での住まいや食糧にも困り、また何よりも数日前に一度守山村へ避難していた藩主が城内へ戻ったと知って、それなら安心と思いこみ再び城下へ陸続として戻ってきてしまったこと。

③ 避難命令の発動時期

このような状況の中で、藩主が避難先から城へ戻ってきたばかりであったためもあり、藩は

人心の動揺を招くまいとして町民に対して、あえて「避難勧告」又は「強制退去」命令を出すことを躊躇し発令しなかったこと。

もし眉山崩壊の一日二日前にでも、藩が町民に対して城下以外の地への強制退去命令を出していたとすれば、その後の津波による被害を除けば、島原城下の死者は明らかに半減あるいはそれ以下の死者数で済んだはずである。

④ 最高責任者の責任放棄

藩主松平忠恕公は極端な病弱であり、かつ虚弱体質、心身耗弱であったためでもあるが、災害発生の数日前には五里離れた守山村に奥方たちを避難させるとの名目で自分まで隠れるようにして避難した。しかしその三日後には島原城に舞い戻った。殿様が逃げたと噂で知った市民たちは一斉に南北の村々に避難したが、殿様が戻ってきたと聞き安心した町民の殆どが城下に戻ってきてしまった。これが住民の死傷者を増大させる原因となった。(結果論であるが、藩主が城へ戻らなければ町民も城下へ戻らなかったものと思われる) そのうえ藩主は、災害発生後8日目には、再び城外の安全な三会村(現島原市三会)にある藩主の別邸へ、奥方と重臣・全藩士を引き連れて避難してしまい、城内を空にしてしまった。最高責任者としての自覚も責任も役割も全く発揮しなかった。

⑤ 最高責任者の死去

しかも藩主忠恕は、その後巡視した被災地の災害被害のあまりの甚大さに驚き「災害後、自分が真っ先に城外の安全な地域へ避難したことが幕府に知れば、藩主として失格であると幕府からお咎めを受け、藩が取り潰されるのではないか」との心労も重なり4月27日(被災後27日目)に51歳であっけなく死去してしまったこと。(幕府からの問責を恐れて自殺したとも言われている。)

⑥ 新たな危機の出現

重臣・藩士たちを振り回し、無辜の市民の被害を増大させた藩主の急死により、残された重臣と藩士たちは、被災者救援と災害復旧作業のさなかに藩主後継の難事が発生してしまった。もし仮に藩主後継が幕府から認められなければ島原藩は軽くて減封か、他国への「転封」、最悪の場合「藩取り潰し」の憂き目にあうところとなった。

筆者は今あらためて「嶋原大變記」を読むほどに、島原での状況が3・11の津浪被害を受けた三陸地方の惨状とあまりに酷似していることに愕然とする。

ただ明らかに違うのはその後の「為政者の対応」である。

220年前、当時の地方政府 local government といえる島原藩は、稀有の大災害を受けながらその後見事な対応と立ち直りを見せた。

災害後には島原藩は幕府から何の御咎めを受けることもなく、むしろ1万2千両の復興支援金まで貸与されている。また心配された藩主の交代も無事認められた。

幕府から島原藩に対して何の「御咎め」がなかったのは、藩主の無能ぶりはともかく（彼が早く退場したことで藩は救われたともいえる。）藩士たちの領民を思う心の篤さと誠心誠意の救助活動や復旧へのたゆまぬ努力が評価されたからではなかったか、と筆者は密かに推測している。

島原藩はその後、前藩主の子で21歳の松平忠憑公のもとで災害復旧に努め、藩主・藩士ともに徹底した儉約と自ら身を切る減俸を実践し、藩士たちも農民とともに鋤を取り田畑を耕し、併せて噴火と津波で被害を受けた領内の荒廃した田畑や港・村落の復旧に努めるとともに、被害にあわなかった地域の領民からの拠金を募り、蠟の増産（災害2年後には領内の蠟の原料となるハゼの生産量は災害前の5倍になった）など

の特産物の増産と専売化を進め、産業振興と輸出の拡大などで藩財政の立て直しに努めた。

なお特筆すべきは藩の立て直しには有能な人材の養成が最重要として災害の翌年には藩校「稽古館」（現 県立島原高校の前身）を創設している。

財政縮減のための藩士のリストラ案も出たが新藩主はそれを一切行わなかった。

そのためか明治時代を迎えるまでの75年間で徐々に昔の豊かさを取り戻したことにより、全国他地方で幕末期に頻発した武士と農民の対立から生まれる農民一揆も起こらず平和を維持し続けたのは、災害を契機に生まれた藩士と領民との深い心の絆から来るものであったろう。かくして島原藩は平和裏に明治維新を迎える事が出来たのである。

地獄のような災難に見舞われた当時の島原侍たちが見せた困難に立ち向かう気概と誠実さ、藩政の経営能力は、業績不振になると恥じることなく社員を無慈悲に大量リストラして、安直に一時の苦境を乗り切ろうとする今日の多くの大企業経営者とは「人間の出来が違う」というべきであろう。

九州の片田舎の僅か7万石の小藩がこれほどの事が出来たのに「今日の日本国の政治家と大企業の経営者たちは何たる体たらくか！」と当時の島原侍や安吉たちから叱られそうである。

島原藩士の心から学ぶ

今こそ我々日本人は、歴史を遡り、過去の災害の中の失敗と成功例から教訓を学ぶべきではなかろうか。

千年前の貞観地震の際には、東海・東北・北海道地域では3・11の津波を超える30メートル強の巨大津波が各地を襲ったことが記録として残されていた。

千年に一度の大津波は「想定外でした」との発言は、今となっては政府や電力会社の無責任な言い訳と批判されても仕方がない。

3・11でこれほど多くの死者が出た原因には

当初発表した津波警報が、実際とはかけ離れた極めて低い予想波高を放送したことによる罪が大きい。また一方、一部の市民についても、これまでも何度か津波警報が発令されても避難しなくても済んできたことで、「慣れ」から来る「軽視」と、「高い防潮堤に対する過信」があったのではないかとされている。

平成24年8月に政府が発表した「南海トラフの巨大地震に関する津波高、浸水域、被害想定」によれば、南海トラフを震源とする海底での巨大連動地震が起きれば、3・11以上の大規模で広範囲の大津波の襲来が予想されている。上記予測によれば南海トラフがある太平洋側から見れば九州島の裏側にある佐世保港でさえ最高3メートルの津波と想定されている。

佐世保港で3メートルならば佐世保駅前周辺や四ヶ町・三ヶ町地域はもとより、さらに佐世保川（佐世保谷）に沿って北へ遡上する津波は優に市役所辺りまで達するのではなかろうか。

もし不幸にして津波の襲来時が満潮や大潮、低気圧下の高潮などの時間と重なれば、佐世保湾から轟湾を経て早岐瀬戸に入った津波は、轟湾から進むにつれ徐々に両岸が狭まる瀬戸の地形により波高を増し、観汐橋下の狭い水道を苦も無く乗り越えて、早岐瀬戸両岸の家々を押し倒し、長崎国際大学の1階部分を洗い、キャンパス内の車を押し流し、さらにハウステンボスのワッセナー1階を水浸しにし、そこに駐車中の車や運河のヨット、戸建住宅などを押し流しながら大村湾へ一気に通過するに違いない。

それは百年後かもしれないが10年後かもしれない。各地の自治体では現在、都道府県防災計画や市町村防災計画の見直しを進めているが、

それには従来想定されていなかった大津波を想定した津波対策を盛り込んだ防災計画や住民の避難計画の策定が盛り込まれる必要がある。

火山の噴火や地震、津波などの自然災害に関心のある方々は、ぜひとも220年前に記録された「島原大變記」と、併せて白石一郎氏の「島原大變」を一読いただき（両書とも佐世保市立図書館にある）島原侍の領民を思う心、すなわち災害時・非常時の武士たる者の精神に倣い、今後の防災・減災計画と救援・復興活動、ボランティア活動に生かされんことをお勧めして筆をおきたい。

本稿が、読者諸兄が今後、防災・減災計画づくりや災害後の救援活動・ボランティア活動を考える際のほんの一助にでもなれば望外の喜びである。

参考文献と資料

- (1983)『7.23長崎大水害記録写真集』(株)ナガサキフォトサービス
- 司馬遼太郎(1978)『街道をゆく・島原天草への道』旭新聞社
- 白石一郎(1985)『島原大變』(株)文芸春秋社
- (1992)『嶋原大變記復刻版及び読解本』島原古文書を読む会
- 兵庫県社会福祉協議会編(1996)『大震災と社協』阪神・淡路大震災社会福祉復興本部
- 外山幹夫(1996)『図説・長崎県の歴史』河出書房新社
- (1997)『長崎県福祉の歴史』長崎県社会福祉協議会
- 島原ボランティア協議会編(2001)『災害ボランティアの風』
- 講演要旨「島原4月朔地震(1792)と島原大變—2」国土交通省雲仙復興工事事務所 平成15年発表・収録